

世本探源

——『世本』受容史研究序説——

李 弘 喆

【要約】

『世本』輯本は先秦史研究の欠かせない系譜史料とされている。しかし、これまでの『世本』研究は輯本を『世本』原本の断片とみなして進め、輯本の文献的性格・輯佚以前の引用形態を十分に意識した上での包括的研究を志向しなかった。本稿は輯本の引用元の文献に立ち戻り、佚文のありかたを検討の対象とし、『世本』研究に新たな方向を示した。そして、学術史の立場から『世本』が文献に現れる時代背景を検討した上で、『世本』引文を逐条蒐集し、その引用のありかた、延いては学術史の立場から『世本』に対する認識、受容のありかたに時代的な特徴の有無を検証した。その受容実態と学問の発展状況とを合わせて、『世本』の解釈・訓詁材料としての特徴を明らかにした。また、応劭が『世本』を『漢書』の注釈に用いたことが『世本』の受容に大きな影響を及ぼし、後世の「漢書学」の発展に関連することを指摘した。

史林 一〇一卷五号 二〇一八年九月

はじめに

学術史の立場から中国の伝統的な学問を検討した場合に「漢唐訓詁学」、「宋明理学」、「清朝考证学」と概ねに三つに分けられる。その中の訓詁学は後漢時代に芽生え、魏晋南北朝時代を経て、唐代に集大成された。五経・三史をはじめ、『孝経』、『文選』など、今日まで伝わってきた主な伝世古典の形はほとんど唐代の前半までに定着し、訓詁学の発展がそれらの古典に反映されているとも言えるだろう。

一方、我々がよく知っている漢籍の形は北宋時代に形成された。木版印刷術は唐代に既に出現していたが、普及するのにはやはり北宋以降である。宋代刊本の權威性は今日に至っても変わらない。しかし、北宋時代に科挙制度の発展とともに書物への需要が次第に変化した。一部の石刻として保存されている経書と、敦煌や日本などに残されている零細な抄本を除けば、今日我々がみることができると言われる伝世古典のほとんどは宋代に刊本とされたものに限られていると過言ではない。刊本の普及によって、多様な写本が駆逐されてしまい、さらに言うところには多くの書物が散佚して消滅してしまった。言い換えれば、「唐宋変革」は書物の世界にも起こったのである。宋代には多くの書物が散佚したが、その中には唐代に盛んに用いられていたものも少なくない。かかる散佚文献は漢唐訓詁学を検討する際には不可欠な要素である。十八世紀以降の清朝考証学者は伝世文献に引用された散佚文献の断片を丹念に集め、可能な限り復原を試みた。その作業で作られた本を輯本といい、『世本』もその中の一つである。「五經」の注釈をはじめ、『史記』、『漢書』の注釈にも散見する重要な注釈材料として使われたことは間違いない。

『世本』は原本が南宋の頃に散佚してしまい、現存する『世本』は一九五七年に商務印書館が清代の考証学者が作った輯本を集め、『世本八種』^②という輯本集にまとめられている。各本の構成は表一のようになっている。

各本の輯本の章立てをみればわかるように、『世本』は専ら先秦系譜資料として認識されている。吉本道雅は系譜資料が先秦時代を通時的に検討する際に避けて通れないものであり、王及び諸侯の系譜は、王（侯）位継承の一般的傾向を反映するものとして取り扱うことは十分可能であると指摘し、さらに王侯・世族の系譜は本来的にはそれぞれの家系において祭祀の必要上保存されていたものと考えられ、『世本』のような資料が編纂される一つの契機が春秋学の発生にあったことは容易に推測されると提示した。^④現在までの『世本』研究は基本的にこのような認識を共有しているのである。しかし、この見解は系譜資料の成立に関する重要な指摘ではあるが、『世本』は系譜資料であるか否か、まずその文献的性格を検討しなければならない。残念ながら、これまでの『世本』研究は問題意識が輯本の中に留まってしまう、輯佚以前の

表一 『世本八種』の章立て

秦嘉謨本	孫馮翼本	陳其榮本	王謨本	張澍本	雷学淇本	茆泮林本
帝 系	王侯大夫	帝 系	三皇世系	帝系篇	帝 系	帝王世本
			五帝世系			
			夏世系			
			商世系			
			周世系			
紀	－	－	－	－	－	－
世 家	－	王侯大夫	春秋列公 世 系	王 侯 大夫譜	王 侯	諸侯世本
伝	－	－	－	－	－	－
王侯譜	－	－	－	－	－	－
大夫譜	－	－	大夫譜	－	大夫譜	卿大夫世本
氏 姓	氏 姓	氏 姓	氏 姓	氏 姓	氏 姓	氏 姓
居	居	居	居	居	居	居
作	作	作	作	作	作	作
諡 法	－	－	－	諡 法 (篇名のみのみ)	諡 法	諡 法
10篇	4 篇	5 篇	10篇	5 篇	7 篇	7 篇

※王梓材の『世本集覧』は正文がない。

引用形態の考察に至らなかったのである。以下、それを振り返る。

『世本』の成立は古くから注目されていた。『漢書』芸文志に「世本十五篇、古史官記黃帝以來訖春秋時諸侯大夫」とあり、班固は「古史官」が『世本』を書いたと記述した。南北朝時代の『顏氏家訓』書証に「世本左丘明所作」が見える。『顏氏家訓』原注に「此說出皇甫謐帝王世紀」とあるが、現存する『帝王世紀』の輯本では確認できない。この見解に対して、孫星衍の集世本序は皇甫謐が『漢書』司馬遷伝の記述を誤読したと指摘しており、^⑥現在では「世本左丘明作説」は成り立たないとい一般的に認識されている。唐代の劉知幾は『漢書』芸文志に基づき、「古史官」を周王室の史官であると主張した。^⑦『世本』が既に散佚していた宋代以降では、清朝考証学者の認識も基本的に上記の諸説を踏襲したものであった。

『世本』の成書年代及び作者についての問題意識はそのまま現代の研究者に継承された。陳夢家^⑧

をはじめ、現代のほとんどの研究者は輯本の内容に基づいて、『世本』の成立年代の下限を検討しようとした。陳氏の「戦国末期成書説」は八十年代中期まで定説となっていたが、一九八六年、王玉徳は『世本』が元々単なる系譜に過ぎず、各篇は均質ではないと指摘した。^⑨この見解は的確ではあるものの、氏の研究目的もあくまで成書年代にあり、各篇の性格の検討はその副産物に過ぎない。二〇〇〇年以後、『世本』全体を分析する研究が現れたが、周晶晶の論説もやはり成書年代から展開するものである。^⑩

これら現代の研究の最大の問題は、輯本を『世本』原本の断片とみなして進められた点にある。そもそも『世本』輯本は、清朝考証学者が、伝世文献において『世本』の引用であると明示された箇所を集め、内容によつて各篇に分類したものであるに過ぎない。実のところ、個々の佚文は長期間にわたつて複数の引用者が選択したものであり、原文の表現が正確に保存されているとは限らない。『世本』輯本は『世本』原文そのものではなく、その「使用痕」に過ぎない。原本の断片として均質に扱いうるものではなく、『世本』に対する複数の引用者の認識が蓄積されたものに他ならない。従来の『世本』研究が成書年代ないし作者に関心を限定し、『世本』の文献的性格に言及しても十分な説得力をもたなかったのは、こうした輯本の性格を十分に意識した上での包括的研究が志向されなかったからである。

二〇〇〇年以降、『世本』輯本を再検討し、あるいは従来の『世本』輯本の輯佚の方法に再検討を迫る研究が僅かにみられるようになった。原昊の「世本作篇七種輯校」は各本輯本の差異を分析した。^⑪また、山田崇仁は「n-gram」統計解析法^⑫で『史記』三家注及び『五經正義』が『世本』を引いている部分と『国語』韋昭注引系譜史料の言語学的構造^⑬を分析した。『世本』の系譜関連の記述形式を想定し、それを参照したとされる『国語』韋昭注を分析することによって、今まで知られていない『世本』佚文が発見される可能性を提示した。しかし、『世本』の引用が明示されない場合は山田氏の方法に従えば『世本』との関連性は判明するが、記述形式を同じくする別の引用先の存在は否定できないのである。要するに班彪・班固父子の時代において、系譜資料は『世本』に集約されたことが証明できない限り、『漢書』成立以前の文

献にみえる系譜関係の記述と『世本』との関連性は保証出来なくなってしまうのである。方法論としては記述形式に頼る原資料の復元及び「佚文探し」の限界が感じられる。だから、本稿は原史料研究ではなく、『世本』の引用を明示したもののみを分析する「受容史」という新たな角度から『世本』研究を進めていく。

筆者は、さらに立ち入って、『世本』輯本が蒐集した佚文のありかたを検討の対象とする。今日までのほとんどの先行研究は『世本』輯本が蒐集した佚文を『世本』原文の断片とみなして分析してきたが、実のところ、これら佚文はとりわけ注釈などの伝世文献に引用されたものである。言い換えれば輯本が散佚した文献の「使用痕」に過ぎず、「使用痕」のみに頼って原物の復元は到底出来ないが、その「使用行為」自体を対象として研究を進めていくことは可能である。このことを手がかりにまずは、『世本』が散佚するまでいかに読まれたか、書物としていかに認識されていたかを検討して、最終的にその書物としての学術史的位置づけを明らかにしたい。

まずは荊泮林輯本^⑭を起点として、『世本』を引用した文献に立ち戻る。つまり、輯本を編纂する過程とは逆方向の作業を試みる。『世本』の文章がどこにあるのかではなく、『世本』の文章がなぜそこにあるのかを考える。引用されていないことも、場合によっては重要な意味を持つ可能性がある。もちろん前近代の文献における引用に明確なルールはなく、出典を明示しないことがあるので、未発見の『世本』佚文が存在する可能性は否定できない。しかし、筆者は『世本』に対する認識をたどり、その学術史的位置づけを検討するという目的に即したものととして、『世本』の引用を明示したものを検討の対象とすることとしたい。なお伝世文献に引用された『世本』の検討という作業においては、原文の表現をそのまま提示する必要がある。そのため本稿では史料の訓読は行わない。

こうした展望のもと、本稿は第一章においては、まず『世本』が文献に登場するまでの学術史環境を整理する。その上で『世本』が姿を現した後漢初期の学術史的立場から『世本』はいかなる書き手によって、いかなるかたちで文献に登場したかを検討する。第二章においては、『世本』を本格的に引用した後漢時代後半期の応劭・高誘の著作を考察の対象と

し、『世本』引文を逐条蒐集し、その引用のありかた、延いては学術史の立場から『世本』に対する認識、受容のありかたに時代的な特徴が認められるか否かを検証する。後漢末期に現れた『世本』宋忠（＝宋衷）¹³注は『世本』受容史を検討する際に最も重要な出来事であり、第二章の最後に宋忠注成立の学術史的背景を試みる。

この一連の作業によって、『世本』をより正確に後漢時代の文献全体の中に位置づけ、さらに当時の学術にいかに関わっていたかを明らかにしたい。これは、清朝考証学者の輯佚とは異なった方法で、『世本』がその歴史的伝承の過程で呈した「本来の姿」に迫る試みにほかならない。なお本稿で確立する方法論を生かして、魏晋南北朝時代から隋唐時代を扱う『世本探源』魏晋南北朝篇¹⁴、『世本探源』隋唐篇¹⁵を作成し、本稿と合わせて『世本』受容史の全貌ないし学術史における役割を明らかにしたい。

- ① 高似孫『史略』「世本叙歷代君臣世家、是書不復見。猶有伝者、劉向・宋衷・宋均三家而已」。
- ② 『世本八種』出版説明参照。
- ③ 吉本道雅二〇〇五序文参照。
- ④ 吉本道雅二〇〇七参照。
- ⑤ 孫馮翼本『世本』孫星衍「重集世本序」参照。
- ⑥ 「顔之推据皇甫謐謂左邱明所書。謐言多不足信、此又誤說班彪伝之文。按彪伝言左邱明作左氏伝三十篇、又撰異同、號曰国語二十篇。下云又有記録黄帝已来至春秋時帝王公侯卿大夫、号曰世本一十五篇。称又有者、別有人撰此書、不必左氏。若彪以為左氏撰、其子固作芸文志、何云古史官乎」。
- ⑦ 劉知幾『史通』雜述「世本并姓、著自周室」。
- ⑧ 陳夢家一九五五参照。
- ⑨ 王玉德一九八六参照。
- ⑩ 周晶晶二〇一〇参照。
- ⑪ 原吳二〇〇八参照。
- ⑫ n gram とは「n 個の単位 (gram) の組み合わせ」を意味する。(n は任意の数を、単位にはこの種の研究では文字や単語を当てる)。
- ⑬ 山田崇仁二〇一一参照。
- ⑭ 荊津林輯本は各本の中で最も優れたものである。詳細については、『世本八種』出版説明参照。
- ⑮ 加賀榮治一九六四は宋忠（＝衷）と記す。

第一章 『世本』受容前史

前述のようにはじめに『世本』に言及した記録は班彪（三年—五四年）、班固（三二年—九二年）^①父子の『漢書』にみえる。あたかもこの時期が中国學術史において最も重要な転換期であり、『世本』が『漢書』に現れたことは決して偶然ではないのである。本章は『世本』が後漢初期の文献に現れるまでの時代背景を整理した上で改めてその學術史的位置づけを再考する。

第一節 前漢末期

『隋書』經籍志（以下隋志と略称）に三種類の『世本』が存在する。即ち「王侯大夫譜」二卷、「劉向撰」二卷、「宋衷撰」四卷である。『漢書』芸文志（以下漢志と略称）にみえる『世本』十五篇と明らかに形態が違ふ。紙の普及によつて、物体としての書物は簡牘から紙へ移行し、そのありかたも變化したのである。隋志にみえる「宋衷撰」とされるものは現存の『世本』輯本に散見する『世本』宋忠注と考えられ、「王侯大夫譜」と「劉向撰」の二種類は現存の輯本に確認できない。隋志にみえる「劉向撰」「世本」を根拠にして『世本』を劉向の著作と主張する見解もあるが、その議論においては十分な証拠が示されていない。しかし、唐初まで「劉向撰」とされる『世本』が伝わったのは確かであり、非常に興味深い。劉向について、武内義雄は「先秦の古典はすべて劉向の校定によつてその面目を一新したはずである」と指摘した。^③さらに秋山陽一郎は「劉向以前に本には「完足本」などという概念は實質的になかった」と指摘し、劉氏校書における最大の功績は本を「定本化」したとされている。^④では、劉向と『世本』との関係はいかなるものなのか。

成帝河平三年（前二六年）本紀に「光祿大夫劉向校中祕書」がみえる。漢志には「每一書已、向輒条其篇目、撮其指意、録而奏之」とあり、劉向は書物が整理される度にその編目と解題を著わしたと考えられる。「目」と「録」とを合わせて

「目録」と称すべきではあるが、誤解を避けるために「序録」と表示する。劉歆は父の劉向の死後、その仕事を継ぎ、出来上がったの書物の「序録」をまとめて『七略』を著わした。^⑤ 漢志は劉歆の『七略』をベースにしたものとされる。

あたかも劉向校書の時期に『世本』が実際に利用されたことを示す記述は『漢書』梅福伝に見える。

至成帝時、梅福復言宜封孔子後以奉湯祀。綏和元年、立二王後、推迹古文、以左氏・穀梁・世本・礼記相明、遂下詔封孔子世為殷紹嘉公。

この記述によれば成帝綏和元年（前八年）『世本』が『左伝』『穀梁伝』『礼記』と併用されたのである。この段階で劉向の校書はまだ途中だったが、この時点で『世本』がすでに整理されており、実用に供されたと考えてよからう。梅福は王莽の時代まで生きた人物であり、梅福伝の記述は司馬遷伝にみえる『世本』使用説より遙かに信憑性が高い。さらにいうと、司馬遷伝の『世本』使用説は梅福伝に記録された出来事に触発されたとも考えられる。

上述のように隋志にみえる「劉向撰」「世本」は劉向の著作ではなく、その解題をする際に著わした「叙録」が附されたものと考えられる。ここにおいて、「宋衷撰」が宋忠の注釈であれば、劉向が『世本』の注釈を著わしたことも考えられるのではないかと疑問がわいてくるだろう。これに答えるためには劉向が生きていた時代より以前の学問のかたちから語らなければならない。

先秦時代から經典を説明する「注釈」的な「経伝」が存在する。その例としては、『左伝』、『公羊』、『穀梁』、即ち「春秋三伝」があげられる。これらの「経伝」はすべて『春秋』経文を解説するものに違いないが、左丘明らが著わしたというのは歴史的事実ではなく、書物が伝授されているうちに何れかの人物が附加されたと考えられる。さらにいうと、多くの「経伝」の中には明らかに戦国から前漢までの長期にわたる積み重ねが認められる。要するに一人の学者が執筆したも

のというよりは、長い時期を経て複数の学者の「蓄積」によって形成されたものである。このように劉向が生きていた前漢末期まで、学問は主に一つの「経伝」を中心として、弟子が師匠の学説をきちんと継承し、即ち「師法」を以て一門の中で伝授していたのである。その代々積み重ねてきた「師説」のまとめは「章句」といい、当時の学問の主流のかたちであった。当時の学問のありかたを考えてみれば、「注釈」という学問のかたちはいまだに成立していないし、『世本』にまつわる学問もない。故に劉向がただ『世本』を解題し、「叙録」を書いたと見なしても大きく外れることはなからう。さらに言うとも漢志より前の文献には『世本』の記録が残っていないことを考えれば、劉向・劉歆父子が『世本』の書名を付けた可能性もあり、少なくとも前漢末の認識が含まれていると推測できる。しかし、仮にそれが事実としても、成書年代とは全く別問題である。言うまでもなく、劉向・劉歆父子の校書は後世に絶大な影響力を与えたのである。そして劉歆が古文学博士を立てることをめぐって、当時の官学である今文学の博士らとの論争は古文学興起のあかしと認識されており、学術史上の里程碑とも言える。ここにおいて『世本』と古文学との関連性が容易に想像されるであろう。序文にも触れたように、現在『世本』が先秦系譜資料と認識されていることも同じ方向の思考であり、つまり『世本』と「古文経学」、殊に「左伝学」との関連性は果たして検証できるのか。

まず、『世本』と「古文経学」との関連性を示している「根拠」ではないかと思われるものをみよう。例えば『礼記』檀弓下注に「穆伯、魯大夫。季悼子之子、公甫也」とあり、『礼記正義』にはそれが『世本』の文であると記されている。また、『毛詩正義』韓奕にみえる「服虔云韓万晋大夫、曲沃桓叔之子、莊伯之弟。晋為大夫、以韓為氏也」である。確かに「服虔説」は『史記』韓世家と異なる。『史記索隱』韓世家には「然按系本及左伝旧説、皆謂韓万是曲沃桓叔之子、即是晋之庶」とあり、『毛詩正義』に引かれた服虔説と『世本』の關係性を示唆するものとされている。しかし、上記の二条は鄭玄・服虔が『世本』を引用した証拠にならない。客観的に言えばそれは唐代の段階の認識に過ぎず、言い換えれば『礼記正義』・『毛詩正義』にみえる『世本』と経学の關係が唐代に付け加えられたものであり、本稿は後漢時代を対象と

するので、その詳細については別稿で検討する予定である。

そして、檀弓下の注も、『毛詩正義』に引かれた服虔説も、どんな系譜資料を引用したのか、『世本』引用をはっきり示さない限り、確証を持って検討しようがない。繰り返しになるが、当時の系譜資料が『世本』に集約されていない限り、記述形式が同じとは言え、それを共用している別の引用元の存在は否定できないのである。そのためにここで方向を変更し、劉向・劉歆父子の時代から『世本』がはじめて文献に現れた後漢時代初期、即ち班彪・班固父子の時代までの学術史の立場から『世本』が当時の学問にいかに関わっていたかを考えてみよう。

第二節 『世本』登場

前述のように漢志は劉歆『七略』を踏襲したものとされているが、実のところ班氏と劉氏の関係はそれだけではないのである。『漢書』叙伝上によれば、班固の伯祖父班序は劉向の校書事業に参加し、さらに出来上がった書物について成帝に進講した。成帝はその才能を認め、校定本の副本を班序に下賜したとされる。⑩同じく『漢書』叙伝上に班彪については、家に賜書があり、裕福であるために遠方より好古の士が班家に集まったとされる。ここで特に指摘しておきたいのは揚雄も班家を訪れたことである。古勝隆一が指摘したように、「劉向の整理を経た書籍はすべて皇室の所有となった。しかも前漢末から後漢にかけての時期、その伝写本が臣下に対して頻繁に下賜されたり貸与されたりする事はなく、また学者が宮廷の図書館に自由に赴いて閲覧することもなかった」⑪とされており、ここにおいて、『世本』はまだ世間に知られるほどには及ばなかったと考えられる。直接に校書事業に関わっていた劉氏、班氏を除けば、その存在を知るのは揚雄のように班家に通った人に限られていることが容易に推測できる。ところで、『漢書』には『世本』の存在に言及するものの、班固は『世本』の内容を引用していなかったのである。この時期において、『世本』を明示した上で引用したことが確認できるのは異端として知られている王充のみである。

王充（二七年—？）の『論衡』をみよう。その対作篇には

今著論死及死偽之篇、明人死無知、不能為鬼、冀觀覽者將一曉解約葬、更為節儉。斯蓋論衡有益之驗也。言苟有益、雖作何害。倉頡之書、世以紀事。奚仲之車、世以自載。伯余之衣、以辟寒暑。桀之瓦屋、以辟風雨。夫不論其利害而徒譏其造作、是則倉頡之徒有非、世本十五家皆受責也。故夫有益也、雖作無害也。雖無害何補。

とある。「世本十五家」は漢志の「世本十五篇」と「十五」という数が共通している。「家」には流派のような意味もあるので、別の系統の十五種類の『世本』が存在したのかもしれない。もちろん漢志がそれらを「十五篇」として数えたのも無理はない。もしそうであれば、各篇は互に一定の独立性を持っているか、或いはそれぞれ別系統のものであるかもしれない。『世本』の詳しい内容が確認できないので、確実な証拠はない。しかし、当時の『世本』は後の輯本とは違い、内容による章立てをしていなかったことも十分考えられる。

『論衡』対作篇における『世本』の「引用」は厳密なかたちではなく、その文章の流れに「倉頡之書」、「奚仲之車」、「伯余之衣」、「桀之瓦屋」を例として挙げ、「世本十五家」の代表としている。対作篇の記述に対して、現存する『世本』輯本の作篇には「倉頡作書」、「奚仲作車」、「伯余作衣裳」が見えるが、対作篇の段階で『世本』の中に「桀作瓦屋」も存在したのではないかと推測できる。

そして、『後漢書』の班固伝・王充伝をみよう。

固字孟堅。年九歲、能属文誦詩賦、及長、遂博貫載籍、九流百家之言、無不窮究。所學無常師、不為章句、舉大義而已。性寬和容衆、不以才能高人、諸儒以此慕之（謝承書曰固年十三、王充見之、拊其背謂彪曰此兒必記漢事）。（『後漢書』班固伝）

王充字仲任、会稽上虞人也、其先自魏郡元城徙焉。充少孤、郷里称孝。後到京師、受業太学、師事扶風班彪。好博覽而不守章句。家貧無書、常游洛陽市肆、閱所賣書、一見輒能誦憶、遂博通衆流百家之言。（『後漢書』王充伝）

やはり王充も班氏を通じて『世本』をみたと考えて良からう。深い関係を持つ二人がともに『世本』に言及したのみならず、学問に対する態度もかなり似ている。王充が班固をみて班彪に予言したかを別にして、福永光司は「王充が班彪父子とかなり密接な学問的交渉を持っていたことは信じられて良い」と指摘した。実はこの二人のみならず、『漢書』揚雄伝をはじめ、『後漢書』にも学問の好悪にかんしては同様な傾向がみえる学者は散見される。

雄少而好学、不為章句、訓詁通而已、博覽無所不見。……家産不過十金、乏無儋石之儲、晏如也。自有大度、非聖哲之書不好也。非其意、雖富貴不事也。顧嘗好辭賦。……実好古而樂道、其意欲求文章成名於後世、以為経莫大於易、故作太玄。伝莫大於論語、作法言。史篇莫善於倉頡、作訓纂。箴莫善於虞箴、作州箴。賦莫深於離騷、反而広之。辞莫麗於相如、作四賦皆斟酌其本、相與放依而馳騁云。用心於内、不求於外、於時人皆習之。唯劉歆及范滂敬焉、而桓譚以為絶倫。（『漢書』揚雄伝）

桓譚字君山、沛国相人也。父成帝時為太樂令。譚以父任為郎、因好音律、善鼓琴。博学多通、徧習五經、皆詁訓大義、不為章句。能文章、尤好古学、数從劉歆・楊雄析疑異。性嗜倡樂、簡易不修威儀、而喜非毀俗儒、由是多見排抵。（『後漢書』桓譚伝）

梁鴻字伯鸞、扶風平陵人也。父讓、王莽時為城門校尉、封脩遠伯、使奉少昊後、寓於北地而卒。鴻時尚幼、以遭乱世、因卷席而葬。後受業太学、家貧而尚節介、博覽無不通、而不為章句。（『後漢書』梁鴻伝）

上掲の史料の太字の部分が示すように、前漢末より後漢初期に至るまで、「今文章句」を批判し、博学を好む風習が次第に広がっていることが看取される。その中、班氏は劉向・劉歆父子、揚雄に深い関係を持ち、王充は班彪の弟子でありながら、「近世劉子政父子、楊子雲、桓君山、其猶文、武、周公並出一時也」と述べており、劉向・劉歆父子と揚雄を絶賛したのである。班固・王充が劉向・劉歆父子、揚雄に大いに影響を受けたことは言うまでもない。揚雄と『世本』の関係性を示す直接的な証拠がないが、漢志に「至元始中、徵天下通小学者以百数、各令記字於庭中。揚雄取其有用者以作訓纂篇、順統蒼頡、又易蒼頡中重複之字、凡八十九章」とあり、また揚雄伝にも「善於倉頡」がみえる。それらに対して、王充の『論衡』對作篇にみえる『世本』関係の記述はまさに「倉頡之書」からはじまり、揚雄と『世本』の関連性を暗示していると考えられないだろうか。実は後漢時代における『世本』受容の展開は揚雄の学問の広がりに関連し、それについては次章最終節で改めて説明する。

一般的にこの段階において、「今文章句」は衰退しつつあるとされているが、実はいわゆる「今文章句」の衰退は学問全体の多様化が進んでいる状態の中に相対化された現象と考えるべきである。劉歆が「古文經学」の象徴とも言えるが、彼より穀梁学に精通する人がどれぐらいいたか。さらに揚雄、王充が持っている識緯思想、班固と『白虎通』との関係を考えれば、これらの人々をただ「古文学者」と認識してしまうのは問題がある。この時期において、学問のかたちは「今文章句」から「古文訓詁」へ移行しはじめ、上掲の複数の史料が示すように、その最大の特徴は学術の多様化であり、言わば「通儒」^⑤の時代と呼ぶべきであろう。

しかし、この時代に「通儒」が現れたとはいえ、この段階で「史」の学問はまだ成立しておらず、經学は学問全体において絶対的な存在であった。後漢時代を通じて「今文經学」は相変わらず官学の主体であり、班固が生きていた時代にその最盛期を迎えたと言えよう。後漢初期において、訓詁学のかたちはいまだに整っておらず、当然『世本』を注釈・訓詁の材料として使用することはなかったのである。文献としての『世本』テキストは前漢末期に劉向によって定着したが、

後漢初期に至るまでもまだ中央にいる班氏と関係を持つごく一部の「博学」を好む人にしか知られていなかったと考えられる。『世本』が登場する裏には前漢末期より後漢初期に至るまで学問の多様化が看取され、逆に言えばその「通儒」の時代が到来しなければ『世本』は世に出られなかったとも言える。上述のように『世本』が初めて文献に現れた時期の学術史の立場からみれば、前漢から後漢初期までの経学に『世本』の引用を求めるのは縁木求魚と言わざるを得ない。

- ① 班彪の生没年は、『後漢書』班彪伝「建武三十年（五四四年）、年五十二、卒官」に拠る。班固の卒年齢は『後漢書』班固伝に「及竇氏賓客皆逮考、兢因此捕繫固、遂死獄中。時年六十一」とあり、竇氏の失脚は『後漢書』和帝紀永元四年（九二年）に見える。
- ② 喬志忠二〇一〇参照。
- ③ 武内義雄一九四九参照。
- ④ 秋山陽一郎二〇一七参照。
- ⑤ 『漢書』漢志序参照。
- ⑥ 「古文」とは秦の統一より以前、即ち戦国時代の列国文字を指す。それに対して「今文」とは前漢時代の文字、即ち隸書を指す。今・古文学の詳細について、『史記』儒林列伝、『漢書』芸文志参照。
- ⑦ 『漢書』楚元王伝参照。
- ⑧ 『後漢書』服虔伝参照。
- ⑨ 即ち世本。唐代以降のテキストに太宗の李世民的諱を避けることが頻見する。
- ⑩ 「旡博学有俊材、……与劉向校祕書。每奏事、旡以選受詔進説群書上器其能、賜以祕書之副」。
- ⑪ 「彪字叔皮……家有賜書、内足於財、好古之士自遠方至、父党揚子雲以下莫不造門」。
- ⑫ 古勝隆一二〇〇一参照。
- ⑬ 『論衡』自紀「建武三年、充生。……章和二年（八八年）、罷州家居、年漸七十、時可懸輿」に拠れば、王充は建武三年（二七年）に生まれ、少なくとも七十歳近くまで存命であった。
- ⑭ 福永光司一九五四。
- ⑮ 「通儒」については加賀栄治一九六四第一章参照。

第二章 後漢時代の受容実態

第一章においては、前漢末期から後漢初期の学術史的時代背景を整理した上で、『世本』が当時の学問多様化変革によって文献に姿を現したことを論じた。本章においては、『世本』が注釈材料として使用される事例を中心として、その学術的位置付けを検討する。『世本』が注釈の材料として使用される前提は訓詁学の成立であり、後漢後期に複数の文献に

使用されたことが、本格的な受容のはじまりと考えられる。実のところ初めて注釈に『世本』を引用した事例は応劭の『漢書集解』である。つまり、はじめて『世本』に言及したのが『漢書』であれば、はじめて『世本』を注釈材料として引用したのも『漢書』の注釈である。

第一節 応劭と『世本』

本題に入る前に「漢書学」の成立について少し述べておきたい。班固が獄死した後、その妹の班昭は『漢書』編纂の仕事を継ぎ、さらに読法を広めたいらしい。『後漢書』列女伝には「時漢書始出、多未能通者、同郡馬融伏於閣下、從昭受読、後又詔融兄統繼昭成之」がみえ、馬融兄弟も絡んでいたと書かれている。かつて吉川忠夫が指摘したように、後漢の初頭に編纂された最初の断代史である『漢書』が成書ののちほどなくしてひろく世に行われたが、後漢時代に『漢書』の難語・難句の読法は既に「専門授業」の方法で伝承されており、「漢書学」が成立したとされている。実に興味深いことで、古勝隆一は「馬融のころから経書の注釈には形態上の二つの変化が起こりはじめ、その一つは注釈家の序文が冠されるようになったことで、いま一つはそれまで別行するのが普通であった注と経とが一つの本に合わせて書かれるようになったことである」^②と指摘した。それに従えば、ここで訓詁学の定着時期と「漢書学」の成立時期とが概ね合致していることは注意すべきであると特に指摘しておきたい。

『後漢書』馬融伝には

……著三伝異同説。注孝經・論語・詩・易・三礼・尚書・列女伝・老子・淮南子・離騷。所著賦・頌・碑・誄・書・記・表・奏・七言・琴歌・对策・遺令、凡二十一篇。

があり、『漢書』の注釈を著わしたことに言及していなかった。また、隋志に記される馬融（七九年—一六六年）^③の著作はすべて經學関連のものであり、『漢書學』との関わりがみえない。馬融と「漢書學」との關係を示す記録は『後漢書』列女伝のみであり、実際にそうであったか簡単に判断できない。顔師古の『漢書』叙例によれば、漢書にはもともと注釈がなく、ただ服虔、応劭がそれぞれ音義をつくったのみとされている。吉川忠夫は応劭の『漢書』注釈の書名にある「集解」に注目し、応劭注より先行する『漢書』注釈の存在を指摘した。実は『後漢書』応奉伝には

著漢書後序、多所述載。（袁山松書曰、奉又刪史記・漢書及漢記三百六十余年、自漢興至其時、凡十七卷、名曰漢書）

がみえる。応劭の父である応奉の生没年は不詳であるが、同じく応奉伝には永興二年（一五三年）に武陵太守に就任したこと、延熹年間（一五八年—一六七年）に武陵蛮を討伐したことなどより推測すれば、馬融と同時代人物と扱っても差し支えなからう。応劭の『漢書』注の裏にはその「家学」が存在し、馬融の頃に「漢書學」が芽生えたことも傍証されるとも言えよう。その背景を念頭に置いて、応劭はいかに『世本』を利用したかをみてみよう。

応劭（？—二〇四年以前）^⑥の『漢書』注釈は『世本』を明示する最も古い引用例であり、二世紀後半のものである。「漢書敘例」には『漢書』の最古の注釈として、服虔と応劭を挙げている。服虔の生没年は不明であるが、『後漢書』儒林列伝服虔伝によれば応劭と同世代であり、両方の注釈の成立も同時であると考えられる。隋志に「漢書一百一十五卷、漢護軍班固撰、太山太守応劭集解」、「漢書集解音義二十四卷、応劭撰」がみえるが、顔師古は「漢書敘例」において、前者は蔡謨（二八一年—三五六年）^⑨撰であり、後者は臣瓚撰であると指摘した。『漢書』注釈の伝承について、吉川忠夫がすでに詳しく論じたので、贅言しない。しかし、隋志にみえる誤認はまさに『漢書』応劭注が「漢書學」において絶大な影響力を示している証拠である。『漢書』応劭注の原書は既に散佚してしまっただが、『漢書』顔師古注に大量に残っている。もち

ろん、それは顔師古の旧注への態度による選択とも考えられるが、言い換えればそれも『漢書』応劭注の影響力を表すものに違いない。『漢書』応劭注における『世本』の引用は以下の通りである。

声者、宮・商・角・徵・羽也。所以作樂者、諧八音、蕩降^⑫人之邪意、全其正性、移風易俗也。八音土曰埴（応劭曰世本暴辛公作埴）、匏曰笙（応劭曰世本随作笙）、皮曰鼓、竹曰管、糸曰絃、石曰磬、金曰鐘、木曰柷。五声和、八音諧而樂成。（『漢書』律歷志）

漢中郡、秦置。莽曰新成。属益州。戸十万一千五百七十、口三十万六百一十四。県十二、西城（応劭曰世本嬌虚在西北、舜之居）、旬陽・北山、旬水所出、南入沔。南鄭・旱山、池水所出、東北入漢。（『漢書』地理志）

庸人之御驚馬、亦傷吻敝策而不進於行、匈喘膚汗、人極馬倦。及至駕齧膝、驂乘旦、王良執靶、張晏曰王良、郵無恤、字伯樂。晋灼曰靶音霸、謂轡也。韓哀附輿（応劭曰世本韓哀作御。師古曰宋衷云韓哀、韓文侯也。時已有御、此復言作者、加其精巧也。然則善御者耳、非始作也）。（『漢書』王褒伝）

『漢書』応劭注にみえる「暴辛公作埴」、「随作笙」、「韓哀作御」は、いずれも「作」と関連する記述であり、「嬌虚在西北、舜之居」は「居」を示すものである。『風俗通』と合わせて、応劭が『世本』を引用したのは主に「作」に関連する事項についてであることがわかる。応劭の著作について、初唐に編纂された隋志には、『風俗通』、『漢書集解音義』、『漢官儀』、『漢朝議駁』等がみえる。応劭の頃に解釈・訓詁学がすでに学問の主流となっていたことは、著者が確認できる注釈が残っていること自体が証している。応劭の学問は根柢として引文の典故を示しつつ、比較的簡潔に物事を説明する典型的な注釈・訓詁学である。その内容は礼制、官制を中心とし、何れも実用性を持ち、その中に『世本』を取り入れ

たことが了解される。

応劭は後漢末期に世が乱れたため、文化が将来に伝わらなくなることをおそれて、『風俗通』を著した。¹⁵⁾『風俗通』における『世本』引用は『漢書集解音義』と異なり、注釈材料としてではなく、その「声音」、すなわち楽器に関連する記述の本文の中に『世本』を引用しており、その引用のかたちが王充の『論衡』と類似する。これに対して、現存する『世本』輯本には表二のように、複数の対応する記述が見える。注目すべきは、『風俗通』声音が「鼓」について「不知誰所作也」と述べていることで、応劭がみた『世本』の中には「夷作鼓」、「巫咸作鼓」の記述はなかったと考えられる。そして、『世本』輯本にある「随作竿」は『風俗通』声音の竿の条には見えない。さらに、『風俗通』声音の簫の条には「謹按尚書舜作簫韶九成……」とあり、『世本』輯本に見える「世本簫舜所造……」路史後記十二注の記述と異なる。¹⁶⁾南宋の羅泌の『路史』が『尚書』によるものを誤認したものであって、『世本』の記述ではないことがわかる。

他に王利器の『風俗通義校注』には『風俗通』の佚文とされるものが収録されている。次のようにその佚文の中に『世本』に言及したものがみえる。

姓氏

- ① 恒氏、楚大夫恒思公之後、見世本、漢有東安長恒裴、子孫因居之。（『元和姓纂』五、『通志』氏族略）
- ② 祝其氏、宋戴公之子公子祝其為大司寇、因氏焉、見世本、漢有清河都尉祝其承先。（『元和姓纂』十、『通志』氏族略、宋本『古今姓氏書弁證』一屋）
- ③ 莢氏、莢成儋子、晋大夫、見世本。（『通志』氏族略）

まず、姓氏の①と②の記述をみてみよう。「見世本」という表現は厳密には引用ではなく、かつ『風俗通』声音にみえる

表二 『風俗通』 声音と『世本』 作篇との比較

『風俗通』 声音	『世本』 作篇
1. 埴、謹按 <u>世本暴辛公作埴</u> 。詩云天之誘民如埴如飴埴燒土也。圉五寸半長三寸半有六孔。其二通凡為六孔。	埴、暴辛公所作也。圉五寸半、長三寸半、六孔也。
2. 笙、謹按 <u>世本隨作笙</u> 。長四寸十二簧像鳳之身。	隨作笙、長四寸十二簧、像鳳之身。
3. 鼓、謹按易称鼓之以雷霆。聖人則之。不知誰所作也。	夷作鼓、巫咸作鼓。
4. 瑟、謹按 <u>世本宓義作</u> 。八尺一寸四十五絃。	宓義作瑟、八尺一寸、四十五絃。
5. 磬、謹按 <u>世本毋句作磬</u> 。	無句作磬、磬叔所造。
6. 鐘、謹按 <u>世本垂作鐘</u> 。	垂作鐘。
7. 琴、謹按 <u>世本神農作琴</u> 。	神農作琴。
8. 箏、謹按礼樂記五絃筑身也。今并凉二州箏形如瑟。不知誰所改作也。或曰蒙恬所造。	
9. 笛、謹按樂記武帝時丘仲之所作也。	
10. 批把、謹按此近世樂家所作。不知誰也。	
11. 竽、謹按礼記管三十六簧也。長四尺二寸。今二十三管。	隨作竽。
12. 簧、謹按 <u>世本女媧作簧</u> 。	女媧作簧。
13. 箎、謹按 <u>世本蘇成公作箎</u> 。管樂十孔長尺一寸。	蘇成公作箎。
14. 簫、謹按尚書舜作簫韶九成。鳳凰來儀。其形參差。像鳳之翼。十管長一尺。	簫、舜所造。其形參差象鳳翼、十管長二尺。

『世本』引用の形式と異なっている。実は唐代の林宝が編纂した『元和姓纂』にも「見世本」が散見される。

一. 公父 魯季悼子紇生穆伯。穆伯生文伯歎。文伯歎生成伯。成伯生頃。頃為公文氏。見世本。（『元和姓纂』一）

二. 孤邱 晋大夫孤邱林之後。見世本。英賢伝出自孤邱封人之後。（『元和姓纂』三）

三. 齊季 齊襄公子季奔楚。因氏焉。魯有大夫齊禿窺。見世本。（『元和姓纂』三）

四. 方叔 鼓方叔之後。見世本。漢功臣新寿侯方叔無咎。（『元和姓纂』五）

五. 曾 夏少康封少子曲烈于鄆。春秋時為莒所滅鄆。太子巫仕魯去邑為曾氏。見世本。巫生阜阜生參字子輿。（『元和姓纂』五）

- 六、恒 風俗通楚大夫恒思公之後。見世本。〔元和姓纂〕五)
七、泰 陸終二子日胡之後。見世本。〔元和姓纂〕五)
八、南宮 文王四友南宮适之後。周有南宮極南宮囂。魯孟獻子生閔。見世本。仲尼弟子南宮縚。字子容。魯國人。〔元和姓纂〕五)
九、右史 右史記事因氏焉。周右史戊。見世本。〔元和姓纂〕七)
十、祝其 風俗通宋戴公子祝其為司寇。因氏焉。見世本。漢有清河都尉祝其承先。〔元和姓纂〕十)

以上の記述をみると「見世本」は『元和姓纂』の注記であることが明らかである。次に③についてであるが、王樹民が点校した『通志二十略』氏族略第三には「蒺氏。風俗通、蒺成僖子、晉大夫也、見世本¹⁷⁾とみえる。王樹民は王利器と同様に「見世本」が『風俗通』の佚文であると判断している。しかし、この「蒺氏」の条を素直に読めば、「晉大夫也」で句を切るのが自然であろう。周知のように、南宋の鄭樵の『通志』氏族略は『元和姓纂』を参照している。『元和姓纂』と同様に「見世本」という注記は『通志』氏族略にも頻出する¹⁸⁾。つまり、王利器は『元和姓纂』と『通志』氏族略の注記を『風俗通』の佚文と誤認したのである。上述のように引用元の文章を『世本』の文章であると誤認してしまうことは輯佚段階でよく発生するので、筆者が唱えている方法論、即ち引用元に立ち戻することは不可欠である。

『風俗通』における『世本』引用のかたちが『漢書集解音義』と異なるが、扱う内容に関しては両者ともに王充『論衡』と同じ傾向がみえており、一つの例外を除けば、全部「作」に関連することは一目瞭然である。両者の成立の前後関係については、『後漢書』応劭伝には

又論當時行事、著中漢輯序。撰風俗通以弁物類名号、釈時俗嫌疑。文雖不典、後世服其治聞。凡所著述百三十六篇。又集解漢書、皆伝于時。

があり、一見『風俗通』が『漢書集解音義』より先行するように見えるが、「又」とは話題を変更するための助字であり、前後関係を示すものではない。さらに言う、その父親による家学の継承を配慮すれば、むしろ『漢書』に関わる学問の方を先に習得したとも推測できなくもないが、書物としての成立については検証できないのである。

応劭は現在確認できる最初の『世本』を引用した人物であり、『風俗通』と『漢書』応劭注が『世本』引用の基礎を築き上げたと考えられる。南朝沈約の『宋書』樂志にみえる『世本』の引用は明らかに『風俗通』の影響を受けたが、その詳細について別稿で検討する。ここで『世本』と『漢書』応劭注との関係について、もう少し語っておこう。

前述のように、「漢書学」の確立は注釈・訓詁学の発展に深く関わっている。さらにいうと、「漢書学」は経学の変容過程の中に派生したとも言える。吉川忠夫の指摘の如く、「漢書学」は当時の経学と同様に「師法」を以て伝授し、少し前の歴史書のみならず、刑政に関わる実用書としてもよく読まれていたとされる。^⑨後漢時代において、経学関係の書物が圧倒的な割合を示したため、『漢書』注釈の材料も主に経学関係の書物に依存しているが、他の經典注釈と比べると合理性のみならず、より一層の歴史的リアリティーが求められていたことが推測できる。無論経学としての「春秋学」が「漢書学」より遙かに先行しているが、『左伝』に歴史的リアリティーを求めたのは賈逵、服虔などの経学者ではなく、魏晉時代の杜預であると考えられ、『世本』と「左伝学」との関連性がそこから生じたものである。

故に「史」の学問としての「左伝学」は「漢書学」より先行するとは言えず、強いて言っても同じ土俵に立つものに過ぎない。『漢書』は後の正史の手本となり、その注釈も後世の史書に大きな影響を与えたのである。数多くの『漢書』注釈のうちに、『漢書』応劭注は最古の『漢書』注釈であり、最も影響力を持つものである。後世の『漢書』注釈、即ち「漢書学」に莫大な影響を及ぼすのみならず、^⑩南朝時代以降成立した「史記学」にも盛んに参照されたのである。最も多く『世本』の佚文を保存しているのはまさに『史記』の注釈であり、『世本』を「史注」材料として扱う認識は『漢書』応劭注によって確立し、「漢書学」の発展と共に広がっており、最終的に「史記学」に受容されたと考えられる。魏晉南

北朝時代における『世本』の受容状況については、別稿の主題として改めて論じる。

第二節 高誘と『世本』

後漢時代に『世本』を扱ったもう一人の学者は高誘である。その生没年は不詳であるが、『淮南子』の高誘注の序文によれば、盧植の下で学んだこと、そして建安十年（二〇五年）に司空掾になったことが分かる。高誘の『孟子』の注釈は既に散逸したが、『淮南子』、『呂氏春秋』、『戦国策』の高誘注は残っているので、それらを検討していく。

まず『淮南子』についてであるが、現在、『淮南子』高誘注が残っているのは原道訓、俶真訓、天文訓、地形訓、時則訓、覽冥訓、精神訓、本經訓、主術訓、汜論訓、説山訓、説林訓、修務訓の十三篇である。その中の汜論訓に『世本』の引用がみえる。

古者民沢処復穴。冬日則不勝霜雪霧露、夏日則不勝暑熱蚊蚋。聖人乃作、為之築土構木、以為宮室、上棟下宇、以蔽風雨、以避寒暑、而百姓安之。伯余之初作衣也（伯余黃帝臣。世本曰伯余制衣裳。一曰伯余黃帝）……

現存する『淮南子』の高誘注に『世本』を明示した引用はこの一箇所のみである。「作」ではなく、「制」を用いている。²³「伯余黃帝臣」は他の注文と同じく、出典を示していない。「世本曰伯余制衣裳」は『世本』の引用を示す。「一曰伯余黃帝」は異なった写本の『世本』を指すか、別の書物を参照した可能性もある。いずれにせよ、高誘は複数の説を提示した上で、『世本』を一説として取り上げた。

次に『呂氏春秋』では、『世本』と深く関連する記述がある。審分覽第五勿躬の記述は『世本』輯本の作篇とかなり重なっている。これを輯本作篇と比較すると表三のようになる。

表三 『世本』作篇と『呂氏春秋』勿躬との比較

世本／作篇	呂氏春秋／審分覽第五 勿躬
1. A. 大撓作甲子。B. 黃帝令大撓作甲子。 C. 宋衷曰大撓黃帝史官。	大撓作甲子
2. A. 容成造曆。B. 宋衷注曰容成黃帝史官。	容成作曆
3. 羲和占日。	羲和作占日
4. A. 常儀占月。B. 羲和作占月。	尚儀作占月
5. 后益作占歲。	后益作占歲
6. A. 胡曹作衣。B. 宋衷注曰黃帝臣。	胡曹作衣
7. A. 夷牟作矢。B. 牟夷作矢。C. 奚、黃 帝臣夷牟作矢。D. 宋衷注曰夷牟黃帝臣也。	夷羿作弓
8. A. 祝融作市。B. 宋衷云顓頊臣。C. 祝 融顓頊臣為高辛氏火正。	祝融作市
9. A. 儀狄造酒。B. 儀狄始作酒醪并五味。 C. 夏禹之臣。	儀狄作酒
10. A. 禹作宮室。B. 禹作宮。	高元作室
11. A. 共鼓貨狄作舟。B. 注曰二人黃帝臣也。 C. 共鼓貨狄黃帝二臣。	虞姁作舟
12. A. 化益作井。B. 宋衷注曰化益伯益也堯 臣。	伯益作井
13. A. 雍父作春杵臼。B. 雍父作春。C. 雍 父作杵臼。D. 雍父作臼。E. 宋衷曰雍父 黃帝臣也。	赤冀作臼
14. A. 相土作乘馬。B. 腸作駕。C. 宋衷云 皆黃帝臣。	乘雅作駕
15. A. 韓哀作御。B. 宋衷曰韓哀侯也時已有 御此復云作者加其精巧。	寒哀作御
16. A. 胘作服牛。B. 注曰胘黃帝臣也能駕牛。 C. 又云少昊時人始駕牛。	王冰作服牛
17. A. 史皇作囟。B. 史皇蒼頡同階。C. 宋 衷曰史黃黃帝臣也囟謂書物象也。	史皇作囟
18. 巫彭作医。	巫彭作医
19. 巫咸作筮。	巫咸作筮

これと似た形で、君守には
六人の「全人」が書かれてい
る。これを輯本作篇と比較す
ると表四のようになる。

袁暗倦三者非君道也。大撓
作甲子、黔如作虜首（虜一
作慮）、容成作曆、羲和作
占日、尚儀作占月、后益作
占歲、胡曹作衣、夷羿作弓、
祝融作市、儀狄作酒、高元
作室、虞姁作舟、伯益作井、
赤冀作臼、乘雅（一作持）
作駕、寒哀作御、王冰作服
牛、史皇作囟、巫彭作医、
巫咸作筮（著筮）、此二十
官者、聖人之所以治天下也。

奚仲作車（奚仲黃帝之後、

表四 『世本』作篇と『呂氏春秋』君守との比較

世本／作篇	呂氏春秋／審分覽第五 君守
1. 奚仲作車。	奚仲作車（奚仲黃帝之後、任姓也。伝曰為夏車正封于薛）。
2. A. 倉頡作書。B. 蒼頡造文字。C. 沮誦蒼頡 作書、並黃帝時史官。D. 宋衷注曰蒼頡沮誦黃帝史官。E. 黃帝之世始立史官蒼頡沮誦居其職矣至於夏商乃分置左右。	蒼頡作書（蒼頡生而知書寫、倣鳥跡以造文章）。
3. 陶制五刑。	皋陶作刑（虞書曰皋陶、蠻夷猾夏、寇賊姦宄。女作士五刑有服）。
4. 舜始陶夏臣昆吾更增加也。	昆吾作陶（昆吾顓頊之後、吳回黎之孫、陸終之子、己姓也。為夏伯制作陶冶埴埴為器）。
5. A. 鯀作城郭。B. 鯀作城。C. 鯀作郭。	夏鯀作城（鯀禹父也。築作城郭）。

任姓也。伝曰為夏車正、封于薛）、蒼頡作書（蒼頡生而知書寫、倣鳥跡以造文章）、后稷作稼（后君稷官也。烈山氏子曰柱、能植百穀蔬菜以為稷）、皋陶作刑（虞書曰皋陶、蠻夷猾夏、寇賊姦宄。女作士師、五刑有服）、昆吾作陶（昆吾顓頊之後、吳回黎之孫、陸終之子、己姓也。為夏伯制作陶冶、埴埴為器）、夏鯀作城（鯀、禹父也。築作城郭）、此六人者所作当矣。然而非主道者、故曰作者憂因者乎。惟彼君道得命之情、故任天下而不疆、此之謂全人。

表三、表四の比較によって、『世本』輯本の作篇は『呂氏春秋』勿躬・君守に対応することが判明した。『呂氏春秋』高誘注には「二十官」についての説明が非常に少なく、『世本』に全く言及していない。六人の「全人」について、『呂氏春秋』高誘注にはすべて注釈がついているが、勿躬の「二十官」と同様に、『世本』の記述と一致していても、食い違っているが、『世本』には言及していない。『呂氏春秋』高誘注には『世本』を明示した引用が見当たらない。

『淮南子』と同様に『戦国策』の高誘注も部分的に残っている。現存する『戦国策』高誘注は第二巻、第三巻、第四巻、第六巻、第七巻、第八巻、第九巻、第十巻、第三十二、第三十三の十巻である。その中には『世本』を明示した引用が見当たらない。しかし、『戦国策』高誘注はその一部が散佚したので、『世本』を引用していないとは断言できない。

高誘が『世本』を用いたと確認できる用例は『淮南子』の注釈にみえる

「作」についての一例のみである。高誘の『淮南子』と『戦国策』の注釈は一部しか残っておらず、検証の限界がある。しかし、『呂氏春秋』には『世本』と深く関連する記述が散見されるにもかかわらず、高誘は『世本』に言及もしなかった。『淮南子』にみえる一例は『世本』の権威性を示すのではなく、複数の異説の一つとして取り上げたに過ぎない。応劭に対して、高誘は『世本』の存在を知っていたが、積極的に引用しなかった。高誘にとって『世本』がいかなる存在であったか、検証することはできない。それは応劭と高誘の学問の違いであろうと考えられるが、このような現象は後の時代にも存在するのであろうか。しかし、高誘の『世本』引用も王充・応劭と同様に、経書とは無関係であり、つまり後漢末期まで『世本』を経書の注釈材料として利用した用例は存在しないのである。

後漢末まで、確認できる『世本』の引用は系譜関係のものがなく、主に「作」に関連するものであることがわかる。「居」に関連する唯一の記述も「舜」の話であり、すべての用例は上古のものである。^⑤『世本』の系譜関係の記述の存在を完全に否定することはできないが、『世本』を明示した引用の中にその引用は見当たらない。漢志に「古史官記黄帝以来訖春秋時諸侯大夫」とあるが、殷周はもちろん、春秋時代に関する引用も見当たらない。後漢が終わるまで『世本』は経書の注釈材料とみなされておらず、専ら物事の起源を説明する際に使用する注釈・訓詁材料として、経書以外の書物に利用されたのである。

『世本』において後漢時代に関心を集めた、言い換えれば権威性を持っていたのはやはり「作」に関連する上古聖人を語る部分である。その中で、『世本』が『漢書』応劭注に引用されたことは極めて重要な出来事であったと考えられる。『漢書学』は後漢から唐代まで衰えず、所謂中世の「顕学」である。^⑥『漢書』応劭注が後の『漢書』注釈に影響を与えたことに鑑みれば、『漢書学』の中における『世本』の引用に注目すべきである。『漢書学』に利用されることによって、『世本』の「史注」材料の性格が確立され、後に『世本』は『史記』の補足・訂正のための注釈材料として、徐広の『史記音義』に引用され、その後「史記学」の発生、発展に深い関連性を持っていたことは紛れもないのである。

第三節 『世本』宋忠注の誕生

後漢末期に『世本』の宋忠注が作られた。宋忠は、生没年不詳であるが、劉表のブレンンとして知られている宋忠と同一人物とされている。現在の伝世文献にはよく「宋衷」と表示され、隋の文帝楊堅の父の名が楊忠であり、その諱を避けるために「忠」を「衷」に書き換えられたと考えられる。^⑦『三国志』蜀書先主劉備伝引孔衍『漢魏春秋』にその活動がみえる。^⑧隋志によれば、宋衷は『世本』の注釈以外に、『周易』、『揚子法言』、『揚子太玄経』等の注釈をも著し、学問の方向が応劭、高誘とも違うのである。現行の『世本』輯本には宋忠の注釈が散見する。『隋書』経籍志によれば、宋忠注は最も古い『世本』の注釈であると考えられる。学術史の立場から何故『世本』の注釈はなぜ後漢末期に荊州で作られたのか。そして何故宋忠の手によって生まれたのか？『世本』宋忠注成立の背景を考える必要がある。

まず、浮かび上がるのは後漢末の乱世である。『三国志』魏書董二袁劉伝に「初平元年二月、乃徙天子都長安。焚烧洛陽宮室、悉發掘陵墓、取寶物。卓至西京、為太師、號曰尚父」とあり、初平元年（一九〇年）に董卓は洛陽を焼き払い、長安に遷都した。また、

十日城陷、與布戰城中、布敗走。雒等放兵略長安老少、殺之悉盡、死者狼籍。誅殺卓者、尸王允于市。……諸將爭權、遂殺稠、并其衆。汜與雒相疑、戰鬪長安中。雒質天子於宮、燒宮殿城門、略官寺、盡收乘輿服御物置其家。

とあり、初平三年（一九二年）の李傕郭汜の乱により、長安も戦場になった。そして『後漢書』儒林列伝の

初、光武遷還洛陽、其經牒祕書載之二千余両、自此以後、參倍於前。及董卓移都之際、吏民擾乱、自辟雍・東觀・蘭台・石室・宣

明・鴻都諸藏典策文章、競共剖散、其縑帛圖書、大則連為帷蓋、小乃制為滕囊。及王允所收而西者、裁七十余乘、道路艱遠、復弃其半矣。後長安之乱、一時焚蕩、莫不泯盡焉。

によれば、漢の中央の蔵書が大量に失われたことが分かる。その中で『世本』も消滅の危機に瀕したかもしれない。混乱している華北に対して、当時の荊州は相対的に安定した環境であった。文化人が荊州に集まり、『世本』の注釈もそこで作られたのである。しかし、宋忠の注釈は後漢時代の同時代史料にみえず、流行したのはだいぶ時代を下って、唐代に入ってからのことである。

紙幅に制限があるが、最後にいささか宋忠の学問の特徴を示しておきたい。魏志王肅伝に「肅字子雍。年十八、從宋忠讀太玄、而更為之解」がみえる。王肅は宋忠のもとに『太玄』を学んだ。実は『隋書』経籍志に

揚子法言十三卷宋衷注。

揚子太玄経九卷宋衷注。梁有揚子太玄経九卷、揚雄自作章句、亡。

揚子太玄経十卷陸績、宋衷注。

とあり、宋忠が強く揚雄の影響を受けていたことは明らかであろう。加賀栄治氏は「総合された後漢通儒の学とは劉歆に發し賈・馬を経て鄭玄に至った古文学とともに、揚雄に發する『太玄』、『法言』の書を伝えた通理の学もあったのである」と指摘した。²⁹ 揚雄の学問は桓譚、張衡、崔瑗、王充に継承され、宋忠もまたその中の一人である。『世本』の注釈が宋忠の手によって誕生したことの裏には「通理の学」³⁰の發展が窺われると言って良からう。『世本』を引用した書物を見れば、『漢書』・『淮南子』の注釈にも物事の起源を説明する材料として使われており、何れも揚雄一脈の「通理究明」の

傾向性と一致している。『世本』宋衷注は現存する輯本に類見し、『世本』の受容を検討する祭に不可欠なものである。『世本』宋忠注の流行については、唐代における『世本』の受容と合わせて、別稿で論じる予定である。

- ① 吉川忠夫一九八四第十章参照。
- ② 古勝隆一二〇〇一参照。
- ③ 『後漢書』馬融伝「年八十八、延熹九年卒于家」。
- ④ 『隋書』経籍志参照。
- ⑤ 「漢書旧無注解、唯服虔応劭等各為音義」。
- ⑥ 『後漢書』応劭伝「(建安)二年、詔拜劭為袁紹軍謀校尉。……後卒於鄴」によれば、応劭は建安二年(一九七年)に袁紹に事え、官渡の戦(二〇四年)以前に鄴で卒した。
- ⑦ 「漢書旧無注解、唯服虔・応劭等各為音義、自別施行」。
- ⑧ 「孝廉廉稍遷、中平末、拜九江太守。免、遭乱行客、病卒」。
- ⑨ 『晋書』蔡謨伝「……(永和)十二年卒、時年七十六」。
- ⑩ 生没年不詳。汲冢竹書を利用していたことから推測すれば、西晋時代の人物であろう。
- ⑪ 吉川忠夫一九八四第十章参照。
- ⑫ 別本は「藻」に作る。
- ⑬ 表二参照。
- ⑭ 「漢書」の実用性に関しては吉川忠夫一九八四第十章参照。
- ⑮ 風俗通序参照。
- ⑯ 表二参照。
- ⑰ 標点は王樹民に従う。
- ⑱ 『通志』氏族略第二、三、四には合計十三例がみえる。
- ⑲ 吉川忠夫一九八四第十章参照。
- ⑳ 加賀栄治一九六四第四章参照。
- ㉑ 韋昭、臣瓚などの漢書学者も『世本』を注釈材料として利用した。
- ㉒ 「自誘之少、從故侍中同県盧君受其句讀、誦拳大義。会遭兵災、天下棋峙、亡失書伝、廢不尋修、二十余載。建安十年、辟司空掾、除東郡濮陽令。親時人少為淮南者、懼遂陵遲、於是以前輔事畢之間、乃深思先師之訓、參以經伝道家之言。比方其事、為之注解。悉載本文、并拳音說。典農中郎將并揖、借八卷刺之、会損身喪、遂亡不得。至十七年(二一二年)、遷監河東、復更補足。淺学寡見、未能備悉其所不達、注以未聞。唯博物君子、覽而詳之、以勸後學者云爾」。
- ㉓ 『世本』輯本作篇に「伯余作衣裳」がみえる。
- ㉔ 諸説がある。高淑芳二〇一四は『戦国策』の第二十三卷、第二十五卷、第三十卷にも高誘注が残っていると主張している。
- ㉕ 前節参照。
- ㉖ 趙翼『廿二史札記』卷二十「唐初三札漢書文選之学」。
- ㉗ 加賀栄治一九六四には宋忠(＝衷)として記されている。
- ㉘ 「劉琮之降、不敢告備。備亦不知、久之乃覺、遣所親問琮。琮令宋忠詣備宣旨」。
- ㉙ 加賀栄治一九六四第一章参照。
- ㉚ 同上。

おわりに

本稿では、まず『世本』と劉向・劉歆父子校書との関係を分析し、前漢末期學術史的時代背景に合わせて、『世本』がいかなる状況の中で世に現れたかを検討した。そして、後漢初期に、劉向・劉歆父子によって整理された書籍の副本を持つ班氏を通じて世に知られたことを明らかにした。ほぼ同じ時期に『世本』に言及した班固・王充の間の関係性を整理した上で、その『世本』に言及する内容を分析し、当時の『世本』に対する認識を示した。さらに、後漢末期の伝世文獻にみえる引用例を集め、当時の『世本』の受容と學問の發展状況とを合わせて、その解釈・訓詁材料としての特徴を明らかにした。そして、後漢から魏晉への転換期に成立した宋忠の注釈の學術史的意義を提示した。

前漢末期から後漢初期に至るまで、學問の絶対的主体である經學自体のかたちが変化し、『世本』は少数の「博学」を好む「通儒」の間に共有されつつあったが、当時の經學に用いられることがなかった。後漢晩期の訓詁學の成立によって、『世本』は解釈・訓詁材料として利用されはじめた。しかし、經書注釈の材料とみなされず、『漢書』・『淮南子』の注釈材料として主に物事の起源を説明する役割を果たした。

後漢時代における『世本』の引用は上古に集中しており、殷周及び春秋時代に関わる引用はみえない。さらに、引用例のほとんどは「作」に関連する記述であるのに対して、系譜や氏姓などの引用はまったく見当たらない。応劭が『世本』を『漢書』の注釈に用いたことは『世本』の受容に非常に大きな影響を及ぼした。『世本』引用の拡大は「漢書學」の發展に関連すると考えられる。さらにいうと、「漢書學」において、『世本』の「史注」材料としての位置付けが成立し、後に『史記』の注釈材料として盛んに利用された。後漢の滅びる頃、荊州において『世本』の注釈が成立し、ある程度の広がりが見られる。宋忠が『世本』の注釈を著わした背景には揚雄が代表とする「通理究明」の學術的価値観が潜んでいると考えられる。それは後の魏晉解釋學の發展にも関わっている。

本稿は『世本』受容史の準備作業として、新たな問題意識と研究手法を提示した。『世本』の受容及び学術史的位置付けを明らかにすることによって、成書年代問題に囚われてしまっている、従来の『世本』研究に新たな方向を示した。今後は、この成果に基づき、『世本』の全面的研究を進める予定である。筆者が示した方法論は『世本』のみならず、『竹書紀年』を代表とする輯本資料を扱う際にも使える、汎用性を持つ有効な手法である。

『世本』は、魏晉時代に入ってから、『左伝』の注釈に現れ、解釈・訓詁材料として経学に取り入れられたが、その痕跡が目立たない。一方、『漢書』・『史記』の注釈材料としてよく使われるようになった。唐代以降、『史注』のみならず、『五經正義』を代表とする経書の注釈にも引用されるようになり、『世本』の引用は爆発的に増えた。それとともに宋衷注も唐代の文献に頻見するようになった。現在の『世本』輯本に宋忠注とされる記述は八十余りあるが、その中で『史記索隱』によるものは四割以上を占めており、唐代における『世本』の受容は宋衷注と深く関わっている。実は『世本』輯本にはある文献から本文とされるものを収録する一方で、他の文献からその注釈とされるものを収録することがしばしばみられる。そのために輯本の本文とその注釈の関係を明らかにすることが求められる。今後、『世本』宋忠注の全面的検証を行い、その上で唐代の『世本』引用形態は爾後の課題としたい。

【参考文献】

- 日本語文献五十音順
- 秋山陽一郎二〇一五「劉向・劉歆校書事業における重修の痕跡（上）」——『山海経』と「山海経序録」の事例から——『中国古代史論叢』第八集 加賀栄治一九六四『中国古典解釈史 魏晉篇』勁草書房
- 武内義雄一九四九『支那学研究法』岩波書店
- 福永光司一九五四「王充の思想に就いて」王充と老莊思想『東洋史研究』十二（一六）
- 古勝隆二二〇〇一「後漢魏晉注釈書の序文」『東方学報 京都』七三
- 古勝隆二二〇一六『中国中古の学術』研文出版

山田崇仁二〇一一「世本と国語韋昭注引系譜史料について——ngram統計解析法による分析——『立命館史学』一二一

吉川忠夫一九八四『六朝精神史研究』同朋舎

吉川忠夫一九九九『汲冢書発見前後』『東方学報』七一

吉本道雅二〇〇五『中国先秦史の研究』京都大学学術出版会

吉本道雅二〇〇七『左伝』と西周史』中国古史論叢』第五集

中国語文献拼音順

陳夢家一九五五『世本考略』『西周年代考・六国紀年』中華書局二〇〇五

高淑芳二〇一四『戰國策高誘注研究』揚州大学碩士學位論文

喬志忠二〇一〇『世本成書年代問題考論』『史学集刊』二〇一〇年第五期

王玉德一九八六『世本成探』『華東師範大学学報』一九八六年第一期

原昊二〇〇八『世本作篇七種輯校』『古籍整理研究学刊』二〇〇八年第五期

周晶晶二〇一一『世本研究』浙江大学博士学位論文

（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

Exploring the *Shiben*: An Introduction to the History of the Reception of the *Shiben*

by

LI Hongzhe

The original version of the *Shiben* 世本 has been lost. The text we see today was compiled in the Qing Dynasty. Nevertheless, it is regarded as an essential historical source for the study of pre-Qin history. The content of the current text is still regarded as representing part of the original book. Comprehensive research on the form of the passages prior to the editing process during the Qing Dynasty and the character of the present text have not been conducted.

In this article, I have returned to the ancient written sources that quote passages from the *Shiben*, examined the composition of the original sentences, and thereby showed the possibility of a new direction in the study of the *Shiben*. The historical background of the *Shiben* as it appears in the literature was examined from the standpoint of academic history. The records of the *Shiben* were collected from the viewpoint of the history of science, and the existence of the characteristics in the way of recognition and reception of the book within the field of academic history was confirmed. I have clarified the characteristics of the *Shiben* as an interpretation and interpretative source.

In addition, I point out that Ying Shao's use of the *Shiben* in his annotations of the *Hanshu* exerted a great influence on the reception of the *Shiben*, and the reception of the *Shiben* is closely related to the development of the hermeneutics of the *Hanshu*.